氏 名 金谷 麻理子

学 位 の 種 類 博士(体育スポーツ学)

学位記番号 筑鹿博甲第 5 号

学位授与年月 令和2年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

審 查 研 究 科 人間総合科学研究科

学位論 文題 目 大学体育におけるスポーツの技能向上を目指した実技授業の

教育的価値と学修効果に関する研究-器械運動(トランポリン)

の授業に着目して一

副 查 筑波大学教授 博士(教育学) 木内 敦詞

副 查 筑波大学教授 教育学博士 鍋倉 賢治

副 査 筑波大学教授 博士(コーチング学)佐野 淳

論文の内容の要旨

金谷麻理子氏の博士学位論文は、大学教育における教養科目としての体育(以下、大学体育と言う)の教育的価値の向上を目指し、大学における教養科目に相応しい学修内容の提案と、それに基づく授業 実践による学修効果を明らかにすることを目的としたものである。その要旨は以下のとおりである。

第1章では、著者は本論文の研究背景として、大学体育の位置づけに関する歴的変遷や社会的背景との関連性に言及した先行研究に基づいて、その教育的価値と現代的課題についてまとめている。その中で大学体育はその重要性は広く認識され、継続的に実施されてきたが、一方で時代の状況に合わせて柔軟に対応しながら、教育目標の多様化を通してその存在を維持してきたと述べている。そして、このことは同時に、その存在意義の危うさをも意味しており、特に 1991 年以降は全廃など深刻な状況は回避されつつも、全国的に大学体育の授業開講数は減少の傾向が認められて、依然としていつ大学体育の「不要論」が再燃してもおかしくない状況にあると述べている。このような現状を踏まえて、著者は本論文全体の目的として、大学体育に相応しい学修内容の提案と、それに基づく授業実践による学修効果を明らかにすることであるとしている。

第2章では、著者は大学体育の目標がスポーツ活動に共通する運動学習そのものに内在している教育価値の追求にあることを論証するために、スポーツ運動学における人間の運動学習の特徴と運動の形成位相に着目して、運動学習の方法と運動経験、そして運動観察能力の関係について考察し、体育における運動学習が人間関係構築のためのコミュニケーション能力の基礎づくりに貢献する可能性について検討している。その結果、大学体育ではスポーツにおける運動の意識的な学習を通して「身体の動ける可能性」(身体性)を高めることによって、学習者に「自己一身体一世界関係」の変容を通して新たな世界経験を獲得させることが可能になること、またこれによって人間関係の構築に不可欠な身体的コミ

ュニケーション能力を獲得させることできる可能性があるということを明らかにしている。

第3章では、著者は大学体育におけるスポーツの技能向上を目指した授業における学修効果を明らか にすることを目的として、器械運動(トランポリン)の授業を事例として検証している。対象とした授 業は、2018年4月~12月に開講された筑波大学共通科目「体育」における応用体育「器械運動」の授 業であり、14回の渡るトランポリンの実技指導において、著者は受講生の技能レベルに応じた練習段階 を設定するとともに、自己観察を伴う意識的な運動学習を促すために、運動の学習理論に関する小講義 や自己観察および他者観察を促す声かけ、毎回の授業終了時にはその日取り組んだ練習課題についての 自己観察内容の記録させることを行っている。分析対象者とされたのは、単位取得者 30 名のうち、研 究への同意や考察資料の提出状況等から24名が選出されていた。分析のために収集された資料は、受 講生自身のスポーツ歴等に関する資料、毎回の授業において受講生がその日重点的に取り組んだ練習課 題に関する自己観察内容の記録、学修成果の自己認識に関するアンケート、トランポリンの練習試技の 映像が用いられていた。分析の結果、ほとんどの分析対象者が運動課題を達成し、トランポリンの技能 を高めることができたとしている。そして、ここでの学修活動を通して、運動の形成位相と運動観察の 体験を認識できたことが確認され、また受講生同士がトランポリンでの運動感覚を共有し、その体験に もとづいて運動共感もできていたことが伺えたと述べている。このことは本授業において実践された学 修活動が、すでに基礎的な技能を有し、運動の学習理論を理解できる大学生に対して有効であるという 可能性が示唆されたと述べている。

第4章では、著者は前章までの議論を踏まえて、トランポリンという特殊な教材だけではなく、大学体育における他のスポーツ種目を教材とする場合にも応用可能であるか否かと、今後の課題を抽出することを目的として総合的な討論を行っている。その中で大学体育は、各大学の教育方針やカリキュラム、スポーツ施設や教員配置の状況によって、多様なスポーツ種目や開講形態で実施されている。このため、事例の検討を通して得られた知見がそのまま大学体育の現場であまねく適用できるとは言い難い。しかし、本論文において一定の学修効果が確認されたことから、このことを大学体育の独自の教育的価値として位置づけることによって大学体育の必要性を主張するための論拠を提供することが可能になると結論づけている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、大学体育授業において、新たな教育的価値の創造や拡張を図ろうとしてきたこれまでの流れの中にあって、スポーツにおける技の運動学習過程を学修活動の中核に据えようとする、いわば原点回帰を主張するものであり、大学体育に関わる議論に一石を投じるものである。また本論文では、トランポリンを教材として、学習者が様々な技を意識的に学習する過程で、身体を通して自己を認識し、他者と共感する能力を身に付けていく過程を様々な資料に基づき、検証可能な方法で明らかにしており、非常にオリジナリティが高いと評価される。

令和2年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士(体育スポーツ学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。